

元留学生のライフストーリーに見る留学評価 — 家族と日本で生活する元留学生の場合 —

八若 壽美子*

(2018年10月1日受理)

Life Story Interview of Former International Students Who Live in Japan with Their Families: How They Evaluate Their Study Abroad Experience

Sumiko HACHIWAKA*

(Received October 1, 2018)

要旨

本研究では、日本の地方大学に1年間留学し、大学卒業後配偶者の仕事の関係で来日し家族と共に日本で生活する元留学生2名を対象にライフストーリー・インタビューを行った。2名の語りから、留学評価、留学と現在の生活との関連、日本語習得と留学評価の関連に焦点をあてて、分析を行った。その結果、以下のことが判明した。①学習環境は2名にとって万全ではなかったが、留学をきっかけに日本語力が向上した、②留学は自信を得、自己成長する場であった、③学内外の人との良好な人間関係が安心できる居場所として機能し、その関係は現在も維持されている、④日本人との関係構築には日本語力が寄与している、⑤留学経験で得た日本社会や文化に関する知識と理解は再来日後の生活に活かされている、⑥結婚、出産や育児によって勉学やキャリアを中断・縮小する選択をしたが、勉学への意欲と学んだことを出身国、日本、広く社会に還元したいという意志をもち続けている。

【キーワード】 留学評価、元留学生、ライフストーリー、家族、再来日

1. はじめに

近年、留学政策や大学での留学生教育の改善のため、大学・大学院時代という人生において大きな分岐点となりうる貴重な青年期に日本留学を選択した元留学生たちにとって、その選択がその後の人生においてどのような影響を与えたのかという長期的な留学成果を元留学生の語りから質的研

*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

究法で導き出そうという研究がなされている。田中 (2014) は、日本留学終了後日本・出身国以外の国で生活する元留学生を対象とした聞き取り調査から、専門性の深化、人間的成長や自信、他者からの評価などの留学成果が留学後も国や地域を超えて波及していることを指摘している。佐藤 (2013) は元留学生のライフストーリーから、元留学生が留学中いくつかの転機を経て自信を得、日本での就職という自己実現を果たす過程を描き出し、その自己実現は日本語を学ぶ自己の変容に支えられていると結論づけている。

本研究は、ライフストーリー研究¹⁾の手法を用い、個々の元留学生が留学経験をどのように捉え、留学経験がその後の人生にどのような影響を与えたかを探るとともに、日本での学修や人間関係構築に大きな役割を果たす日本語習得と留学評価との関連を解明しようという一連の研究の一部である²⁾。

一連の研究では、多様な元留学生の語りから個々の留学評価と日本語習得の関連を検討し、元留学生が留学経験を肯定的に評価し、その評価に日本語習得が関与していることを示してきた。

日本で働く元留学生を対象としたものでは池田・八若 (2016)、池田 (2018) がある。池田・八若 (2016) では、日本の大学院修了後日本で働く元留学生2名がコミュニティ参加への意思決定を学びへの転機とし、多様なコミュニティ内での人との関わりから日本語を学び続けており、日本語習得が現在の良好な人間関係構築や肯定的な留学評価に結びついていることを示した。池田 (2018) では、英語によるプログラムで学位を取得し日本で生活する理系研究者夫婦を対象とし、学位取得や研究業績が留学評価の重要な指標であること、研究上の使用言語は英語で日本語学習歴も短い環境によって英語と日本語を使い分けてコミュニケーションをとっており、日本滞在の長期化に伴い出産や子育てなどによる日本語でのコミュニティ参加が増えていることなどを明らかにした。

出身国で大学教員として働く元留学生を対象とした池田・八若 (2017) では、研究分野が日本と密接にかかわっている文系元留学生は日本滞在経験そのものや日本語習得にも研究上の意義を見出し、研究内外で日本との関係を維持していることが明らかになった。一方、研究での使用言語が英語の理系元留学生は日本語学習は短い期間であったにもかかわらず日本語会話を保持し、研究上の日本との関係を維持していた。八若 (2018) では、インドネシアで日系企業社員や通訳・翻訳者として働く日本語専攻の元交換留学生3名を対象とし、1年間の交換留学が日本語の上達だけでなく自信の獲得や視野の拡大をもたらし、現在の仕事にも繋がる経験として高く評価されていることを明らかにした。

以上のように、留学評価及び留学後の日本との関わり方に日本語習得が寄与していることを明らかにしてきたが、一連の研究をはじめこれまでの研究は元留学生のキャリアと結びつけて議論されることが多かった。しかし、元留学生の留学後の人生は多種多様で、社会情勢や家族の都合などにより必ずしも自らが思い描いたように進んでいくわけではない。本研究では、日本語専攻で日本の地方大学に約1年間の短期留学³⁾し、出身国の大学卒業後配偶者の仕事の関係で再来日して家族と共に日本で生活する2名の元留学生を取り上げる。結婚、出産、育児などで自らが描いた研究やキャリアを中断または縮小する選択をして、日本で家族と共に暮らす元留学生である。2名のライフストーリー・インタビューをもとに、(1) 日本留学に対する評価、(2) 留学と現在の生活との関連、(3) 留学中・留学後の日本語習得と留学評価の関連の3点に焦点をあてて分析した。

2. 研究方法

2018年8月と9月に、元留学生2名にライフストーリー・インタビューを行った。2名は東南アジアの大学で日本語を専攻し、在学中に日本の地方大学C大学に約1年間の留学をした。出身国の大学の課程を終え、日本で働く夫との結婚を機に再来日した。インタビュー調査の依頼時に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話してもらいたい」という教示と大まかなインタビュー項目⁴⁾を伝えておいた。インタビューは調査者と一対一で行い、必要に応じて調査者が質問を加えながらインタビュー項目に関することを自由に話してもらった。インタビューは協力者の了解を得て、ICレコーダーに録音し、文字化した。インタビューの内容の中から、上述の3点に関わる言及を中心に抽出し、時系列にまとめた。限られた紙面の中で、極力協力者の言葉をそのまま掲載するため、会話形式と引用を交えた要約の形式⁵⁾とを併用した。紙面の関係上、フィラー（あの、えっと等）や言い間違いは省略した。最小限ではあるが理解に支障があると思われる明らかな間違いはインタビュー協力者の了解のもと修正を加えた。また、個人や場所が特定されるような固有名詞は一般名詞や記号に変更した。

3. 語りと考察

本章では、各インタビュー協力者について、略歴を示し、その語りを「日本語学習及び留学のきっかけ」「留学中の生活」「人間関係」「留学生としての学修」「留学後から再来日まで」「再来日後の生活」「留学を振り返って」の項目に分けて具体的なエピソードを交えて提示した上で、それぞれの留学評価、留学と現在の生活との関連、日本語習得と留学評価の関連について述べたい。

3.1.1. インタビュー協力者Aさんの略歴

協力者Aさんは、出身国の大学日本語学科3年修了時に同大学の交換留学生募集に応募し、選考を経て約1年間C大学に留学した。留学終了後大学在学中に結婚し、日本で働く夫と生活するため大学卒業後來日し、約1年がたった。調査時の1か月後に出産予定であった。

3.1.2. Aさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

日本語に興味を持ったきっかけはアニメであった。アニメを通して敬語や女性語、男性語などいろいろな話し方がある日本語に興味を持った。高校で第二外国語として日本語を選択したが、日本語は難しい言語だと思われており、当時は3年間続けて勉強する学生は少なかった。出身国には日系企業も多く、日本語を学べば就職の可能性も広がるという母親の勧めもあり、出身地の大学の日本語学科に入学した。

留学した先輩の経験を聞き、自分自身も日本を実感したいと思うようになった。3年生になって「留学しなければ」というあせりもあり交換留学生募集に応募した。選考の結果C大学に留学することになった。

《留学中の生活》

日本に来る前は、日本語が通じるかどうかなど不安と緊張があったが、分からないことは辞書で調べたり日本人に聞いたりして解決しながら、「実際にやればやれます」と徐々に自信を得ていった。

留学前は花火大会、お祭り、遊びなど日本で体験できることへの期待も多くあった。しかし、C

大学のあるD市は静かな地方都市で留学前の日本のイメージとは違い、留学当初は退屈を感じた。実際のところ、奨学金が得られなかったため最大の不安は経済面で、出身国に比べて物価が高いこともあってアルバイトをしなければならず、期待したような生活は難しかった。授業にも順調に参加できるという期待があったが、時間的に勉強に集中できなかった。

A： 私一つしか選べなかったんですよ、その時は。どちらか、生活か、勉強か。で、私はやっぱり生活のほうが一番必要かなと思って。やっぱり集中できなかったんです。

*：⁶⁾ 勉強に？

A： はい。人によって違いますけど、でも、私はそういうタイプです。

Aさんは先輩がアルバイトをしていた居酒屋でアルバイトをするが、大変なことも多かった。

A： 暇な時はすごい暇だし、お金も減らしますよね。ものすごいぎやかだったら、すごい疲れるし、仕事がお金がありますけど、やっぱりね、居酒屋は夜しか仕事がないので、次の日は大学に通って、眠い。ちょっと大変でした。で、店長は優しいですけど、でも留学生、外国人もやっぱり平等に扱うので、ちょっといろいろなカルチャーショックもありました。例えば、日本人は、人の前でしかるとか、注意するんですよ。(中略)ま、理由はたぶん他の人が同じ間違いをくりかえさないように、その人を叱る。でも、私の国の常識だったら、それはもう軽蔑される。

今は「日本の文化のほうがいいかな」と思うが、文化差に当初は驚いた。その居酒屋でのアルバイトをやめようと思ったこともあったが、C大学のある地方都市ではモスリムとしての問題もあった。

A： 私、その時期、やっぱりその居酒屋を出ようかなと思ったら、他のバイト先に連絡してみたら、やっぱりイスラム教とか、ヒジャブを被った人、そんなに理解がないので、D市は、ちょっとね、困ります。

結局Aさんは留学期間を通して留学生の雇用に慣れている同店でアルバイトを続け、自信や達成感を得ていった。

A： 日本で学んだことはやっぱり survive みたいな、人生の survive。日本語で何というの？

*： 生き抜く？

A： 生き抜くという知恵、もらいました。頑張ればやっぱり自分の目的、例えば遊ぶところ、ディズニーシーとか、自分のお金で行けるようになって、すごいうれしい。

勉強との両立は難しかったが、アルバイトを通して日本社会についても多くを学んだ。

*： 日本の社会のことは実際に。

A： はい、今分かります。例えば、日本人と話す時のマナーとか、いろいろな地域の人に教え

られたりします。日本の、仕事のこととか、環境とか、店長が教えたこと。

一方、期待外れだったことの一つは、日本人の友達を作るのに時間がかかったことだ。留学生同士は本音対本音で話せる友人がすぐできたが、日本人と同じような関係になるのには約半年はかかった。

《人間関係》

しかし、Aさんは留学中に印象に残っていることとして、まず人間関係に関することをあげた。

第一は、いろいろな国から来た留学生と交流できたことである。留学生寮で共に生活する留学生の数人とすぐに打ち解けて、よく一緒に話したり行動を共にしたりした。今もSNSで連絡をとりあっている。

次に、アルバイト先の店長に日本での仕事について多くのことを教えられたことだ。

A： 店長がやさしくて、日本人の仕事環境、仕事のマナーとか、今でもまだ残っています。例えば、私、料理をするたびに、必ず店長のやり方、店のやり方、今でもまだやっています。残っています。例えば、作業が終わった時に必ず清潔にする。

三番目は、大学周辺に住む地域の人々に大変お世話になったことである。最もお世話になったZさんは出身国と交流のある先生から紹介された老婦人で、Aさんはその家族や友人とも交流が持てた。

A： (Zさんは) いつも困った時、自分のお金がない時に、いつもおごったりします。ごちそうとか、で、人生相談も。そのほうがすごい助かりました。お米がなかったら、Zさんから、いただきました。すごいやさしいです。

*： そうですか。そういう人、ありがたいですね。

A： で、またZさんの輪からいろいろ紹介してもらって。例えば、三味線のイベントとか、日本にある関係のプログラムとか、連れて行ってくれたりします。ピクニックとかも。

さらに、日本人学生についても6カ月ぐらい過ぎると個人的なことも話せる友人がチューターをはじめとして数名でき、再来日時に再会するような関係が築けた。教員や同じ授業をとるクラスメートとの関係は問題はなかったが、主として授業だけの関係だった。

《留学生としての学修》

留学時の学修については、経済的な問題から生活に重点を置き、勉強に集中できない自分自身に不満だった。

日本語のクラスは4レベルのうち最も上のクラスで難しかったが、ついていけた。日本人学生向けの日本語教育や異文化理解に関する専門科目はあまり考えず選択したこともあり、難しくてもよくわからなかった。

A： なので、それがやっぱり精神的にもね、影響があります。なんか自信がないなって、行きたくないなっていうあれもありますけど。

出身国と日本との教育の差も感じた。授業方法について日本の授業はよく計画されていて時間もぴったり終わった。国での教育方法をもっと改善しなければならぬと感じた。

日本語については、留学中に受けた日本語能力試験 N2 に合格できず、上達を実感できなかった。上達を感じられたのは、帰国直前に出たスピーチコンテストで優勝した時だった。出身国との違いなど日本で感じたことをまとめた内容だったが、聞き手である日本人に伝わったと感じた。スピーチの練習でも数名の地域の人に添削してもらったり、発音などについてアドバイスをもらったりして、約2カ月間週3回くらい練習に付き合ってもらった。

《留学後から再来日まで》

留学終了後は出身国の大学で卒業に必要な授業を履修した。留学先で履修した科目に単位互換ができないものがあったり、留学先にはない科目があったためだ。婚約者が日本で働くことになったため、卒業を待たずに結婚した。その後教育実習を終え、卒業論文を提出して、留学終了後約1年半で卒業した。

専門分野の知識については帰国後のほうが得られたと感じている。3年次修了の留学時は研究について何も知らず無計画だったので、研究については先生から「留学で何を学んだか」と聞かれても答えられなかった。

A： 自分で自分の国で勉強しました、研究ってどんなことをするのか。その時もまた、自分の国だからもっと時間がありますよね。なので私、ゆっくりと研究論文とか、いろいろ読みましたけど、帰国後上達しました、逆に。時間がありますよね。バイトがない。

*： なるほど。専門的なことは国のほうがゆっくり勉強できた。

A： はい。はい。逆。その時先生からの授業も、論文指導も受けましたし、講義も受けましたし。なので、自分で習って、学んで、分かったこと、たくさんあります。

論文作成を通して日本語も上達したと感じている。

A： いろいろな先生に「留学したからあなたは日本語がもっと誰よりも上達しなきゃ」と期待されました。なので、私も頑張らなければ。それがきっかけです。

留学経験者に対する周囲の期待がきっかけとなり、帰国後さらに日本語の勉強に熱心に取り組むようになった。

《再来日後の生活》

卒業の2か月後、夫が働いている日本の地方大都市E市に来た。来日後は妊娠したこともあって、主婦として生活している。日本人との交流は夫の会社の人とはあるが、一般的な話をする程度である。アパートでの近所づきあいもあまりない。

A： 今も、主人の会社の友達も、日本人、いろいろなレベルの人がいらっやいますけど、今も日本人はそんなに、私たちもそんなに

*： 深く関わることはない

A： 関わることはない。私たちはやっぱり、二人のほうがいいかな。

現在最も交流があるのは夫の会社の外国人社員である。会社には同国人は夫以外に1名だが、ドイツ、タイなどからの外国人社員がいる。

A： やっぱり主人の友達とかはよく交流します。

*： 例えばどういう交流？

A： 食事会とか。例えば、イタリアのレストラン行ったり、スペインとかイタリアとか、いろいろなレストラン、いろいろな国のレストランとか、行ったりする。

*： ああ、なるほど。いろいろな国の人と

A： それもなんか、なつかしいですね。留学のようにみんな交流してます。

また、大都市E市は地方都市D市と違って、留学生、技能実習生、介護士など多くの同国人がいるので安心である。

妊娠を期に「病院」という新たなコミュニケーションの場が加わった。外国人に対応してくれる病院を探すのは費用面のこともあって苦労したが、何とか見つけられた。

A： 先生との交流は順調です。いつもチェックする時には必ず主人が来て、で、三人で日本語話すのもちょっと大変なこと。また専門用語が出ますね。婦人科的なあれ。出ましたけど、自分も妊娠に関係ある言葉を暗記します。なので、もし先生が難しく説明したら、必ず主人が私とまたディスカッションしたり。意外と先生に私たちの日本語、通じてます。たまには、英語も話します。

病院はこれまでに外国人の出産に対応してきた実績があるので大丈夫だと思う。ただ、Aさんは具体的には語らなかったが、外国人ということで一人の看護師から差別を受けたという。

A： でもだいたい大丈夫です。みんなやさしい。今母親のクラスとかにも参加しなければならぬし、ちょっと緊張して。

今後、夫の仕事の関係で数年は日本にいる予定である。男の子なのでヒジャブなどの服装の問題がないため女の子ほどではないが、子育てにも不安がある。

A： 宗教と、食べ物、たぶん一番難しい。

*： 言葉。

A： ま、言葉もですね。みんながここに長く住むと日本語しか知らないなので、家でたぶん自国語とか地元の言葉とかも教えなければなりません。それも大変かもしれないです。

《留学を振り返って》

Aさんは留学経験を次のように評価している。

A： 全体的にはやっぱりさっきのように、私、勉強よりも社会のこと、日本の社会を学ぶことができました。勉強はたぶん45%くらい。日本の生活は55%くらい残っています。気持ち的には不満ですね。自分に不満でした。

*： 自分自身に。

A： なぜなら、専門的なこと、専門的な授業はそんなにマスターできなかったの、ちょっと残念でした。

しかし、留学を通して日本での日常生活や日本人との接し方について分かるようになったことを評価している。

A： 最終的に、やっぱり日本を知るには、まず社会のことを学んだほうがいいと思います。勉強はいつでもできるんですけど。

日本で働く夫ともよく話すが、留学で学んだことや地域の人に教わったマナーなどを実際に適用すると「日本の常識が分かる人」だと言われることもある。留学で得た「survive」する「知恵」は失われず、現在の生活に活かされていると感じる。

再来日時には日本の大学院に進学したいという計画があった。今は出産、育児を中心に考えているが、将来的には育児が一段落したら奨学金を探して勉学に集中できる形で日本の大学院に進学したいと思う。そして国に帰ったら出身大学の日本語教育を発展させたいと思っている。

3.1.3. Aさんの語りのまとめ

先輩の話を聞いて応募し選抜されて期待に胸を膨らませて来日したが、奨学金なしで留学したAさんは経済的な問題から生活を支えるアルバイトに時間をさかざるを得なくなった。性格的にも両立は難しく、勉学に集中できたとはいえ不満を残す結果となった。特に、専門科目については問題意識の低いまま履修したことや日本語のレベルが十分でなかったこともあって修得できたことは少なかった。

しかし、留学終了後、留学経験者に対する周りの期待から、さらに熱心に日本語学習に取り組んだ。専門分野や研究に関してはアルバイトの必要がない留学後のほうが時間的な余裕もあり、十分に組み合わせたという。留学中は不満が残った勉学面だが、留学に対する他者の評価が留学後の学習の動機づけとなり、結果的に日本語の上達を実感できることになった。

一方、Aさんは留学経験を通して「survive」するための「知恵」を得たと語っている。居酒屋でのアルバイトでは文化差や時間的な面で苦労があったが、アルバイトを通して日本の社会や仕事への取り組み方、日本人との接し方などを知り、再来日後の生活に役立っている。自分の力で得たお金でやりたいことができたという経験もし、「やればできる」という達成感や自信に繋がった。

また、留学で最も印象に残ったこととして「人との出会い」をあげた。その中でもまず留学生寮で共に生活する世界各国からの留学生との交流をあげた。数名とは来日後すぐに打ち解けて共に多くのことを語り合い、行動を共にする関係が築け、最もいい思い出であるとした。次に、アルバイト先の店長から学んだことである。アルバイトは時間的にも体力的にも大変だったが、店長から教わった日本人の職業意識や就労姿勢などは現在の生活に活かされている。三番目に地域の人々から生活面、勉学面の双方で多くの支援を受けたことだ。困った時の相談からスピーチコンテストの練習まで様々な形で支えられ、安心して頼れる場となった。最後に、日本人学生の友人作りには時間がかかったが、半年くらいを経て数名であるが仲のよい友人ができた。これらの人々と現在も連絡を取り合い、関係を保持し再来日時に数人と再会をはたしている。

Aさんの留学生活は、留学前の期待とは異なり、宗教や経済的な問題、文化差など様々な困難に直面したが、留学生仲間、日本人学生や地域の人々など学内外の人々に多層的に支えられ、日本の社会への理解を深め、困難を乗り越え、自信や自己肯定感を獲得していった体験であったと言える。

再来日をし主婦として生活し始めたAさんは留学時と同様日本で生活する外国人とまず交友関係ができるが、日本人とは深く関わっていない。日本人との交流については、関係作りに時間がかかるという留学中の経験に加え、夫と二人であることや大都市E市には同国人が多いことなどから留学時ほど気にしていない。妊娠、出産で、新たなコミュニティ参加と日本語が必要となったが、一部差別的な扱いも経験したものの、日本語でのコミュニケーションも良好で多くの人が好意的である。出産後の子育てでも、宗教や食べ物、言葉の教育など、外国ならではの不安もある。しばらくは育児中心の生活になるが、日本にいる間に奨学金を得て大学院への進学することを模索している。

Aさんの留学評価は、大学卒業後の進路は異なるが、八若(2018)の奨学金を得られなかった交換留学生と酷似している。両者ともに外国生活で様々な困難を乗り越えたことによって自信を得たが、経済的な理由からアルバイトに時間をとられ勉学に集中できなかったという後悔を残している。しかし、共に留学終了後も勉学への意欲を失わず、勉学に集中できる環境での進学チャンスを追い求めている。経済的格差のある国からの留学生に対する経済支援のあり方は検討の必要のある課題である。

3.2.1. インタビュー協力者Bさんの略歴

協力者Bさんは、出身国の大学の日本語学科1年次修了時に選抜試験を受け、奨学金を得てC大学に約1年間の留学をした。大学卒業時には結婚を考えていたので、就職せず自営業などをして、3年後日本で働く夫との結婚を期に来日した。調査時には夫が働く東京で、7歳と1歳8カ月の2児の育児をしながら、翻訳や通訳の仕事をしていた。留学終了後十数年が経過していた。

3.2.2. Bさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

Bさんの父親が日本留学経験者だったため、子どもの頃から日本の本や絵本などが身近にあり、日本に興味があった。日本から来た父のお客さんとの接触経験から、「大きくなったら日本語や日本文化が勉強したい」と考えるようになった。

高校卒業時は国内情勢の影響で大学が閉鎖されていた時期ですぐに大学に進学できなかった。パソコンの専門学校に行ったり、ボランティアの先生が教える私塾で日本語を勉強したりしていた。大学が選べるようになって、大学で日本語を専攻することになった。日本語学科の一期生だった。

1年次に日本への短期留学の選抜試験があったが、日本語の既習歴のあったBさんは有利だった。面接や書類審査を経てたった一人の奨学生として選ばれ、地方都市D市にあるC大学に1年間留学することになった。奨学生に選ばれたのは「宝くじに当たるみたいな感じ」だった。

《留学中の生活》

外国に行くのも、一人暮らしも初めてだった。大学で1年間教科書で勉強しただけの日本語だったので、留学前は不安だったが、期待も大きかった。

B： 自分がテレビとかで見てる日本が実際に見れることとか、そういうことで、すごいわくわくしてました。不安もありますが、すごいいっぱい楽しみにしてました。

実際に見た日本は、空気や道路もきれいで交通も便利だったが、出身国との違いも多く驚くこともあった。到着直後は留学生担当の教職員に暖かく迎えられ、「自分の親戚のところに行った」ように感じ、安堵した。日本語は教科書でしか勉強していなかったので、最初は早口や小さい声で話されると聞き取れず困ったが、「やればできる」と思って頑張った。

日常生活で困ることはあまりなかった。寮も立派で、居心地がよかった。

B： 寮で一緒に生活する友達もみんな優しいから、ほんとに楽しい一年間でした。寮の中でも、イベントをやったりして、ウェルカムパーティとか最初やってて、すごい楽しかったです。ハロウィーンとか。そう、いろいろ自分の国の料理を作ってみんなで食べたりとかして、とてもいい思い出がいっぱいできました。

10月に来日したので慣れない寒さに苦労したが、父親の友人に炬燵をもらうと、炬燵のない留学生の多くがBさんの部屋に来て過ごしたのもいい思い出である。

Bさんが留学した当時奨学金受給者はアルバイト禁止と言われていたので、アルバイトはしなかった。家族からも1年だから仕事よりもいろいろな体験をして帰るようにと言われていたので、父親の友人を訪ねたり、北海道、京都、名古屋などを旅行した。

思っていたことと違ったのは、C大学にはBさんのような1年間の短期留学の留学生がいなかったことだ。

《留学生としての学修》

Bさんが留学した十数年前は、大学の受入体制もまだ十分ではなく、日本語の授業は学部留学生向けの上級と、大学院入学前予備教育としての初級しかなく、Bさんのレベルに合う日本語クラスは開講されていなかった。仕方なく上級の授業をとったが、日本滞在・日本語学習歴の長い学部留学生と一緒に勉強するのは大変だった。

B： 私はまだ初級なんですけど、上級や中級の人たちと一緒に混ざってやることになって、ちょっと大変でした。でも、大変というか、自分が追いつくようにやらなければと思って、一生懸命できるかぎりまた勉強して、帰る時にはそれなりに、日本語は身につくようになってきました。

また、人前で発表したり意見を言ったりする機会がない自国の教育システムとの違いにも戸惑った。

B： 最初は人の前に立つのも勇気がなくて、それにプラス、自分が書いた文章をみんなの前で言うというのは、すごい大変なことでした。恥ずかしかったです。あとは、パソコンですね。パソコンの使い方なんかも、私の国はそんなに発達してなかったので、向こうでもあんまり私はできなかった。ここに来てパソコンのことやったりしたんですが、それはすごい難しかったです。

日本人学生向けのクラスも聴講した。聴講だったため試験をうける必要がなかったので、プレッシャーはなかった。

B： 指導教員の先生の授業とかすごい楽しくて、あの時交流がいっぱいできましたし。

この授業のグループ活動で、Bさん自身がテーマとなって国の文化、食、服装などについていろいろ聞かれたりしたのも楽しかった。

1年間の留学を通して自分自身の日本語の上達も感じたが、留学は自分そのものが変わるような経験であった。

B： 最初に比べれば、やっぱり、人の前でちゃんと話せるようになったし、大きい声で話せるようになって、自信をもって生活できるようになりました。新しい自分ができたみたいな感じになりました。

*： 来る前と、日本語だけじゃなくて自身が変わったってことですね。

B： そうですね。全部変わらして、自分自身が。日本語もやっぱり最初の頃に比べたら、すごい聞き取りもできるようになって、普通のトーンで話しても少しわかるようになって、自分の方からもちゃんと少しはできるようになりました。

《人間関係》

別のプログラムであるが同国人2名と一緒に来日したことは心強かった。留学生や日本人学生との友人関係も良好だった。

B： 友達の関係も、みんなは優しくて、日本人の友達も優しいんですが、寮で一緒に生活する友達もみんな優しいから、ほんとに楽しい、一年間でした。

*： 日本人の友達もけっこういました？

B： 日本人の友達もいました、けっこう。私のところにも遊びに来たりして。でも、日本人よりは一緒に住んでる寮の友達とか、もっと会う機会が多かったです。一緒にどこか遊びに行ったりとか。

日本語の授業でも中国人留学生に漢字の勉強を手伝ってもらったりした。今も連絡を取り合う留学生仲間もいる。

留学生サポートのボランティアとして寮に毎週来ていたXさんにもお世話になった。

B： Xさんが毎週来たりして、分からなかったこととか、聞いたりして、あとXさんがいろいろなところに連れて行って、実際に教えたりしてました。

Xさんとは今でも年賀状のやり取りをしており、東京に引っ越した後Xさん宅で当時の留学生仲間が集まったりして交流が続いている。

また、近隣住民のVさんに花火大会に浴衣を着せてもらったり、二十歳になったBさんの成人式に着物を着せてもらったりしたことが最も印象深い思い出の一つになっている。Vさん夫妻とはよく連絡をとっており、D市を訪問すると今も暖かく迎えてくれる。

指導教員をはじめ教員との関係も良好だった。指導教員には授業外でもいろいろな所に連れて行ってもらったり、帰国前には国で習っていた竖琴の演奏会を開いてもらったりした。指導教員と

は今でも B さんの自宅で会ったり、一緒に出身国にも行ったりするなどの繋がりがある。

《留学後から再来日まで》

留学後は出身大学の2年生に復学した。留学による日本語の上達と言う点では、留学しない学生と比べて発音がきれいで自然な話し方だと言われた。スピーチコンテストでも優勝した。3年後出身大学の日本語学科を卒業した。

日本語教師になりたいという気持ちもあったが、結婚を考えていたので就職はせず自営業になった。当時は出身国と日本との関係もそれほど盛んではなく、日本語学科を卒業してもツアーガイドなどしか就職の選択肢がなかったこともある。父の勧めもあって小さな酒屋やレストランを経営した。大学卒業の3年後に結婚し、日本の地方大都市 E 市で働く夫と生活するため来日した。

《再来日後の生活》

来日直後は特に何もしていなかったが、和食を学びたいという気持ちからほどなく日本料理店でアルバイトを始めた。日本での初めてのアルバイトだったが、システムになかなか慣れず苦労した。妊娠したため約1年でアルバイトをやめ、第一子を出産した。

リーマンショックの影響を受けて夫が E 市の会社をやめ、新たな仕事が見つかった東京へ引っ越した。そのまま専業主婦を続けることに不安を感じ、自分のできる仕事を探した。

B : 私もそのまま子育てとか主婦になるのが、ちょっと不安で。自分が勉強したこと、大学まで卒業できて、何も役に立たないのはちょっとつまらなくなって、不安で。それで、ある会社で面接することになりました。そこは、日本語翻訳とか通訳、出身国の言葉の先生、募集しているところ。もともと先生になりたかったので、日本人に自分の言葉教える先生もすごいと、考えてて。それでそういう会社に最初に登録して、面接も受かって、そこで日本人たちに国の言葉を教えることになりました。

* : そうですか。しばらく先生をしてたんですね。

B : それから、通訳もやったり、簡単なことから翻訳もやり始めたりしてて。私も自分が大学まで卒業して何もやらないと、自分の国のためにも日本にも何も役に立たない。自分が架け橋になりたかったから、自分の国のためにも何かできることはやりたいですよ。それで、やっと就職できて、仕事できて、楽しかったです。

* : けっこうニーズもあるんですね。

B : そうですね。私がやり始めた頃からどんどん日本と国の関係もよくなって。前よりは政治も変わったりして、それから仕事もどんどん増えてきて。(中略)

* : 今も続けて。

B : 続けてやっています。翻訳とかはお家でもできる。通訳はあんまり、子どもが二人になって。預けられる時間帯なら、ちょっとだけ下の子にも一時保育、預けたりしてやっていますが。翻訳の仕事が多いですね。

福祉関係からアニメ、ビジネス関係など幅広い翻訳を手掛けている。

B : 勉強していても使わないと忘れてしまいますので。翻訳とかすることによってもっと字とか、漢字とかわかるようになって、すごい。だいたい見たらすぐわかるようになって。それはとてもいい仕事です。勉強にも繋がってるから。

この他、大使館などのイベントで声がかかれば豎琴の演奏などもやっている。

《日本での子育て》

第一子が5歳になる前に夫婦で今後のことをいろいろ考えた。出身国の情勢も変わり、日本にいた同国人も帰国して転職する人が増えた。国に帰ることも考え、母語と日本語の2言語で育てた子どもの発話が遅いのが心配だった。Bさん夫婦は子どものことを中心に考え、教育でより手厚い支援が受けられる日本を選んだ。子どもたちが自分で進路を決める大学進学くらいまでは日本にしようと考えている。

今は二人の子どもの子育て中心の生活だが、日本での子育てにも苦労がある。

B： 学生の時と比べたら、今は苦労。全部が初めて初体験みたいなことで。(子どもの)先生たちと今でも面会していろいろ話して。あと、ママ友との付き合い。

*： ママ友。けっこう難しいらしいですね。

B： 幼稚園の時は、かなりひどいママとか会ったことがあります。でも周りにも優しい方が多いから、あの方たちが守ってくれて助かったことが。

*： 日本人同士でも難しいらしいから。

B： そうですね。私は最初F区に住んでいて、息子が通っていたところは、外国人が珍しくて、息子しかいなかったのでも外国人の私は少し日本語できるほうだったので、そんなにだったんですが。ママ友は日本人同士でも難しい。いいママもいれば、ちょっと。

*： 合わない人もいる。

B： でも、あの時からずっと付き合い今でも姉妹みたいになっている方もいます。それで去年彼女と娘さんと女性ばかり、おばあちゃんと三人で私の国に。

*： 行ったんですか。へえ。

B： どこの国でもいい人、悪い人が。そういうのあるから、それは気にしないようにしてます。

そして、日本での生活について次のように付け加えた。

B： どんなことでも日本は基本があるから、慣れれば大丈夫なので。規則とかルールとか守れば、そんなに大変なことはないかなと思って。

《留学を振り返って》

Bさんは1年間の留学に非常に満足していると、振り返った。

B： あの時若かったし。でも大冒険でしたね、私にとっては大冒険でした。いろいろなことが初体験ばかりで。でも、それがあって私は今のように自信を持って言えるようになったから、それが自分にとってはほんとに宝物のような体験でした。あとは、あの時周りの方々とか、先生方がすごく優しくしてたから、それがあって、心も強くなって、日本はもっと好きになって。東京はやっぱり全然違います。なんか付き合い方が違って。

*： 最初はD市のほうがよかった。

B： もし東京だったらそんなにいい印象があったかわからないですが。みんながすごいあった

かいから、自分がどんなに不安があっても、そういうことがあるから、乗り越えられました。いろいろな苦勞を。今でもD市が大好きです。

留学前にもっと日本語ができればよりコミュニケーションがとれたかもしれないと思うこともある。

B： ちょっとだけの日本語だけで、でもずいぶんコミュニケーションもできて、ずいぶん一年間楽しく過ごせたので、何よりもよかったと思っています。

*： 留学中やっておけばよかったと思うようなことはありますか。

B： 私は、かなり怖がり屋なので、自分のほうから声をかけたり、苦手なタイプで。なかなか友達が。恥ずかしがり屋だから。自分からもっと自分の方から挨拶して、コミュニケーションとってれば、もっと友達とかできたかなと思って。それだけ後悔しています。

日本で子育てをしながら翻訳などに携わっている現状にも満足している。

B： 自分ができること、海外にいながらでも国のためにとか、日本のためにとか、両国のためにやりたかったので、それが実現できて、今満足しています。

今後の希望は、子育てが一段落したら、大学などで勉強しもっと活躍できるようになりたいということである。

B： まだまだ日本語は難しいから、これからも勉強したいことがたくさんあるから、もっともっとできるようになりたいです。私は結婚することを選んだから。実はほんとは大学とかで続けて勉強したかったです。(中略) もしこの子たちはちょっと楽になったらまた自分が勉強したいなって。大学とかで。

3.2.3. Bさんの語りのまとめ

Bさんの留学中の学習環境はいいとは言えなかった。日本語学科の1年次終了時点で留学したBさんの日本語レベルは初級修了程度であった。Bさんが留学した十数年前はC大学の受入体制は整っておらず、Bさんのような短期留学生向けの授業はなくやむなく上級クラスをとったため、授業についていくのは大変だった。また、講義中心の出身国の教育システムと違って、人前で意見を言ったり発表したりしなければならぬことにも戸惑った。クラスメートに助けをもらいながら、追いつけるように努力した結果、帰国時には自分自身で上達が実感できた。

Bさんの留學生活で特筆すべきは多くの人とよい関係を築き、その関係を十数年後の調査時にも維持していることである。留学生仲間をはじめ、大学の近隣住民や留学生寮のボランティアの方には勉學上の支援だけでなく、地域の行事などへの招待や着物の着付けなど様々な形でお世話になった。指導教員との関係も良好で、授業外でもいろいろな所に連れて行ってもらうなどした。留学直後の少ない日本語の知識でもコミュニケーションを何とかとり、暖かく接してくれた人々のおかげで、多くの苦勞も乗り越えられた。

Bさんにとって、日本留学は「宝くじにあたった」ようなもので「宝物のような」経験であると

振り返り、高い満足を示している。また、留学は「新しい自分」になるような体験だったという。留学を通して、自信を持って行動できるようになり、現在の自分があると評価している。

Bさんの人生は国内情勢や家族の状況などの関係でBさんの意志だけで決められないことが多かった。日本語教師になりたい、大学院に進学したいという思いもあったが、結婚を選び再来日し、子どもが生まれ、子育て中心の生活になった。自国の国内情勢が改善したので帰国することも考えたが、子どものことを中心に考え、日本で教育を受けさせることを決めた。日本での子育てでは子どもの学校とのやり取りやママ友との付き合いなど苦勞も多いが、周りの人々に助けられることも多く、姉妹のような関係の友人も得た。

日本での人間関係構築には日本語力が助けになっているとBさんは感じている。また、「どこの国でもいい人、悪い人が」いるから「気にしないようにしてます」という発言に見られるような対人意識も功を奏していると考えられる。また、「どんなことでも日本は基本があるから、慣れれば大丈夫」「規則とかルールとか守れば、そんなに大変なことはないかな」という発言からは適応力の高さも窺える。

主婦を続けることには不安があり、自国語を教える仕事を得たのをかわきりに、育児をしながら翻訳や通訳を中心に仕事をしている。Bさんは翻訳・通訳という学んだことを活かせる職業を得た現状に満足している。海外にいながら自分の国と日本の双方に貢献ができ、翻訳・通訳を通してさらに多くのことを学べる点が今の自分にとっていいという。Bさんは子育てが一段落したら大学などで勉強し、さらに両国間で活躍できるようになりたいという意欲を示している。

4. 考察と今後の課題

本章では、2名の語りから読み取れる留学の意義、再来日した現在の生活との関連、留学評価と日本語習得との関連について考察を加え、今後の課題を述べたい。

日本語専攻の2名にとって、大学在学中に選抜されて実現した1年間の日本留学はまたとない貴重な機会であった。しかし、留学中の学習環境という点ではAさんもBさんも恵まれなかった。十数年前に留学したBさんは短期留学生の受入体制が整っておらず、自分の日本語能力に合う授業が受けられなかった。奨学金が得られなかったAさんは経済的不安のためアルバイトに時間をさき、勉学に集中できなかった。Bさんは上級レベルの授業についていくのは大変だったが、帰国前には自分自身の上達が実感できた。一方、Aさんは勉学とアルバイトの両立が出来なかった自分自身に不満が残ったが、「留学経験者」への周りの期待から帰国後奮起して日本語を勉強したことがその後の上達に繋がった。留学前の期待とは異なる形であったが、日本語専攻の学生にとって留学をきっかけとした日本語力の向上は成果の一つと言える。

また、両者は、大学での学修以外にアルバイトや地域コミュニティとの関わりを通して日本社会や日本文化について多くのことを学んでいる。1年間という限られた期間の留学では、日本での経験一つ一つが日本に対する理解を深めるものとして認識されていることが窺える。留学経験から得た日本社会への理解と知識は再来日後の生活にも役立てられている。

さらに、経済面や学修面での苦勞、教育システムや宗教、生活習慣の違いなどの文化差を克服し、「やればできる」という自信や自己成長を感じたことも大きい。Aさんは留学を通して生きるための「知恵」が身についたという。Bさんは留学によって「新しい自分ができたいな感じ」と評し、留学を経験したからこそ自信を持って生活できる今の自分があると述べている。Bさんは様々な経緯を経ながらも学んだことを活かせる翻訳・通訳という仕事に就けたことに満足している。さ

らに、2名はもっと学びたいという意欲と、自らが学んだことを出身国、日本、広く社会に還元したいという強い意志を持ち続けていることも確認できた。

日本人学生を対象としたものであるが、奥山(2017)は約1年間の留学体験の効用を質的に分析し、留学生活でのコミュニティ参加とそこでの活動や達成感が大きな意味を持ち、留学後も自信と人生に対する前向きな意欲となるとし、これが留学経験の最大の効用であると指摘している。日本留学を通して自信を得、現在も学習意欲や向上心を持続し、新しい局面に前向きに挑んでいる2名にも同様の留学経験の効用が認められよう。

また、2名が様々な困難を克服し達成感や自信を得ていく過程には様々なコミュニティの人々との良好な人間関係があった。一つは留学生寮で生活を共にした世界各国からの留学生である。両者ともに寮生活を最も楽しい思い出として語り、そこで得た友人関係を保持している。もう一つは、地域コミュニティの人々との交流と支援である。2名ともにキーとなる人物がいた。Aさんの場合はアルバイト先の店長と近隣住民Zさんである。店長からは日本で仕事をするにあたって多くのことを学んだ。Zさんからは勉学、生活双方の支援を受けただけでなく、Zさんを通して人との繋がりを広げられた。Bさんは近隣住民のV夫妻と寮のボランティアXさんから様々な支援を受けた。これらの人々は2名にとって留学中安心して身を置ける居場所としての機能を果たし、現在も続く関係となっている。

久野(2017)は、編入留学生のライフストーリーを大学から仕事へのトランジッションという観点から分析し、留学生のキャリア教育を考える上で卒業後転職等に際して抱える問題を共有する複数の他者の存在や居場所の必要性を提言している。再来日後問題を共有できる者として夫や同国人コミュニティなどの存在も心強いが、留学中に築いた良好な人間関係が引き続き同様の機能を果たすとともに新たな日本人コミュニティとの関係構築に踏み出す礎となっていることも観察された。

2名が留学中に構築した人間関係は大学が提供した接触機会が必ずしもきっかけではなく、先輩の紹介や偶発的なものである。日本人との人間関係を構築する上で日本語力が寄与したことは2名の語りから窺えるが、良好な人間関係を2名が築けた要因や構築のプロセスは本研究では十分に描出できなかった。追調査によって明らかにし、留学生教育の一環として人間関係構築に有効な方策を検討していく必要があるだろう。

留学終了後の人生は直線的ではなく、社会情勢などの外的要因によって方向転換を迫られることもあるだろう。2名のように自身が思い描いていたものとは異なる選択を迫られた時、それぞれがその時その時遭遇する課題に対して決断をし、自らの道を拓いていかなければならない。本研究において留学がそのための自信や自己肯定感を得る場であることが示唆されたが、それをどのようにライフコースを通じて維持し、発展させていくかも探る必要もあると考える。

少子化に伴う労働力不足を解消するため、日本は外国人雇用の拡大へと舵をきった。日本の労働の担い手となる元留学生への期待はますます高まるだろう。日本を外国人にとって魅力ある就労の場、生活の場にしていくためにも、引き続き多様な元留学生のライフストーリーを収集し、個々の人生の豊さに繋がる留学生教育の在り方や日本社会の新たな方向性を探っていく予定である。

注

- 1) ライフストーリーとは「個人のライフ(人生、生涯、生活、生き方)についての口述の物語」であり、「個人

のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」(桜井 2012)である。

- 2) 本研究は平成 29 年～平成 32 年度科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号 17K02839 研究代表者: 八若壽美子) による研究成果の一部である。
- 3) プログラムによって「短期」の捉え方は様々であるが、本稿では学位取得を目的とした正規留学との区別から 1 学期 (セメスター) ～2 学期の留学を便宜的に「短期留学」と呼ぶ。
- 4) インタビュー項目:
 - ・ 留学前: 留学したいと思った動機やきっかけ / どうやって日本語を学んだか / ○○大学を選んだ理由 / 留学前の不安・期待していたこと
 - ・ 留学中: 来日時の様子 / 期待していたこととの違い / 留学生としての生活 (勉学・日常生活・友人関係) / 印象に残っているエピソード / 先生・クラスメートとの関係 / 地域のひととの交流 / 日本語学習について (授業中・授業外) / 自身の日本語に対する意識 / 日本語上達の実感
 - ・ 帰国後: 帰国後から卒業、再来日まで / 再来日の経緯 / 現在 (日本での) の生活 / 現在及び将来設計において留学経験が役に立ったと思うこと / 日本語に対する意識 /
 - ・ 全体: 自身の日本留学経験をどう評価するか / やってよかったこと、やればよかったこと / 現在の生活との関連
- 5) 要約した部分の「」は協力者の言葉を引用したものである。
- 6) 「* :」は調査者の発言。

引用文献

- 池田庸子 (2018) 「元留学生のライフストーリーにみる留学評価－研究者夫婦の場合」『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』 1, 45-55.
- 池田庸子・八若壽美子 (2016) 「日本で働く元留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学留学生センター 紀要』 14, 49-66.
- 池田庸子・八若壽美子 (2017) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価－出身国の大学教員の場合」『茨城大学留学生センター 紀要』 15, 13-28.
- 奥山和子 (2017) 「留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス－質的研究法を使って－」『神戸大学大学教育推進機構大学教育研究』 25, 83-101.
- 桜井厚 (2012) 『ライフストーリー論』 弘文堂.
- 佐藤正則 (2013) 「留学経験の意味と自己実現についての考察－元留学生のライフストーリーから」『早稲田大学日本語教育研究センター言語文化教育研究会』 11, 318-327.
- 田中京子 (2014). 「日本留学の長期的成果－第三国に住むラテンアメリカ出身者の場合」『名古屋大学国際教育交流センター 紀要』 創刊号, 5-11.
- 八若壽美子 (2018) 「インドネシアで働く元交換留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』 1, 29-43.
- 久野弓枝 (2017) 「中国人編入留学生のキャリア形成に関するライフストーリー研究 (3)－トランジションと agency に着目して－」『札幌大学総合論叢』 44, 61-71.